

岳父の心境

阿羅本 景

麦秋五月、白髪白髭と、外観は老年に差し掛かりつつも背筋にまるで竹でも入ったかの様に、背を伸ばして歩く老年の男がいる。

もはや黒髪は鬢にも残らず、白く変じた髪と同じ色の細い髭をびんと蓄えた老人は、畦から田植え前の田圃を眺め、眼をそのまま転じて青々とした聖五月の青葉に満ちた山並みに注ぐ。しばらく男はそうしていたかと思うと、袂からなにやら折り畳んだ紙を取り出す。

老人は着流しに帯、足袋に下駄とこのご時世に珍しいほど古風な恰好であったが、電信柱すらまばらなこの田舎の風景の中では、自然と日本の古くからあった光景の様に馴染んでいた。顔には目尻や口元には隠し切れぬ皺が刻まれ、眉さえも白かったが、畦を歩く彼の姿は正に豊饒という字に相応しい雰囲気であった。

彼が取り出したのは、封の切った封筒であった。封筒を片手に彼は裏返し、その下に毛筆で記された住所にしばし目を注ぐ。

封筒の裏には、信州の地名と、遠野 琥珀の文字が女性の柔らかい手で書き記されている。

老人は顎を撫で、髭を片手で摘むと、ふむと錆びた声で唸る。

「さて、嬢ちゃんの仮寓はこの辺と見えるが……」

この老人が嬢ちゃんと呼ぶのはこの手紙の送り主、琥珀のことであった。彼は琥珀とは面識があり、彼女のことを少なからず知る人間であった。彼は辺りをぐるりと見回し、その視界の一隅に生け垣に囲まれた農屋を認める。

「ふむ、あの辺りか……まだ陽も高い、のんびりと行くことにするかの」

畦に立ち止まっていた老人は、封筒を戻すとゆっくりと歩き始める。

老人とは言うが、腰も曲がっていないし足取りもゆつたりとしていたが都会の町中を歩く若者達よりもしっかりとしていた。和装の風袋が風袋であり、彼のことを最初に見た者はこの白髪の老人を、剣術を修めた達人かどこかの道場主、あるいは茶道の道人かなにかに見ることであろう。

だが、老人はそのどれでもなかった。

彼は——医師であった。

医師、医者とは言うが近代的な西洋医学を身につけた医師ではない。この和装の恰好が物語るとおり、漢方と和方、そして多分に怪しげにも聞こえる民間療法などを主とする医師であった。そして、彼は医者が最初の仕事ではなかった。長く医者をしているが、その前歴は娘にも語ることはない。

老人は下駄を鳴らして歩き続け、畦を抜けて生け垣の脇を通り、くの字型の農家の瓦の屋根と蔵の屋根を見ながら進んでいく。そして、生け垣の切れ目にさしかかり、ひよい、とその中を覗いた。

ケーコツコツコ、と雌鳥が鳴く声が聞こえる。

そして、その後に歩く少女の姿。

老人は生け垣の影から姿を現し、農家の庭で鶏を追う少女の姿を見つめる。

鶏は忙しなく小股に歩き、外には出ようとせず物置の方にふらふらと進路を変えて進んでいく。その後ろにいた少女は、僅かに眼を細めて現れた老人の顔を見る。

老人はこほん、とひとつ咳払いをする。

「ああ、久しぶりじゃな、嬢ちゃん——」
「——時南先生。」

少女はそう呟くと、呆気にとられたように立ち尽くす。

姿は蝦色の留め袖と帯、髪を白いリボンで留めている。顎の線と造作が整い、美少女と言って差し支えのない姿であった。そして、琥珀色の瞳。

その瞳ゆえかゆえならずか、少女の名前もまた琥珀、という。

「え、あら、先生……まさかこんな遠くまではるばるいらっしやるとは」

琥珀は唐突に現れた時南に、驚きを隠しきれない様子であった。手に持った杖を困ったように反対の手に持ち替え、背中などに隠したりと慌てた素振りを見せる。

老人——時南宗玄は、そんな琥珀を見て笑う。

「なに、謝るのはこっちの方じゃよ。嬢ちゃんのところを尋ねるのじゃったら、先以て伝えておくべきじゃったが……まあ、老い先短い老人の気まぐれと許してくれ」

そう言うと、宗玄はからからと声を上げて笑った。

琥珀はそんな宗玄をしばらくどうしたら良いのか咄嗟に判断が付かない様子で眺めていたが、落ち着きを取り戻すと頭を下げて宗玄に挨拶をする。

「遠路はるばるお越し頂き有り難うございます、先生。このようなどころで立ち話も失礼ですので、どうぞこちらにお越し下さい」

「ああ、邪魔する……そうぞ、奥に通さんでも縁側で結構、今日はお嬢ちゃんと世間話をしにきただけじゃからな」

「はい、それではお茶をお煎れしますので、お待ち下さいませ」

琥珀は宗玄を軒先の縁側に通すと、先に履き物を脱いで上がり、中から円座を

取って一足先に戻ってくると、縁側に座を設ける。

宗玄がそこに腰を落ろすと、琥珀は奥に静かな足取りで消えていった。

宗玄は一息つくくと、改めて農家の庭先を眺める。さきほど見た雌鳥は、小刻みに動いて物置の地面をつついていいる。ごく穏やかな、絵に描いたような農家の光景。

「……嬢ちゃんも、いろいろ考えることがあると見えるわい」

宗玄はその光景を見ながら、誰にも聞かれないように密かに呟いた。

宗玄と琥珀の関係は、主に薬学の師弟に当たる。一応は開業医であり、遠野家や有間家の専属医であった宗玄は、故あって遠野家に引き取られている使用人の少女・琥珀にその技を教えていた。

理由としては、時の当主遠野幹久の側に仕える琥珀に、病がちの彼を介助するための医学の心得を身につけさせる、と言う物であった。義務教育をちゃんと受けていたかも不明確な琥珀に対しては、世間の基準からすればまともな医師ではない宗玄という師弟の組み合わせは、なかなか悪くないものであった。

その結果、宗玄の知る際どい効能を持つ、毒とも言えるような民間治療や薬剤の調合の知識まで琥珀に伝わってしまったのであるが。

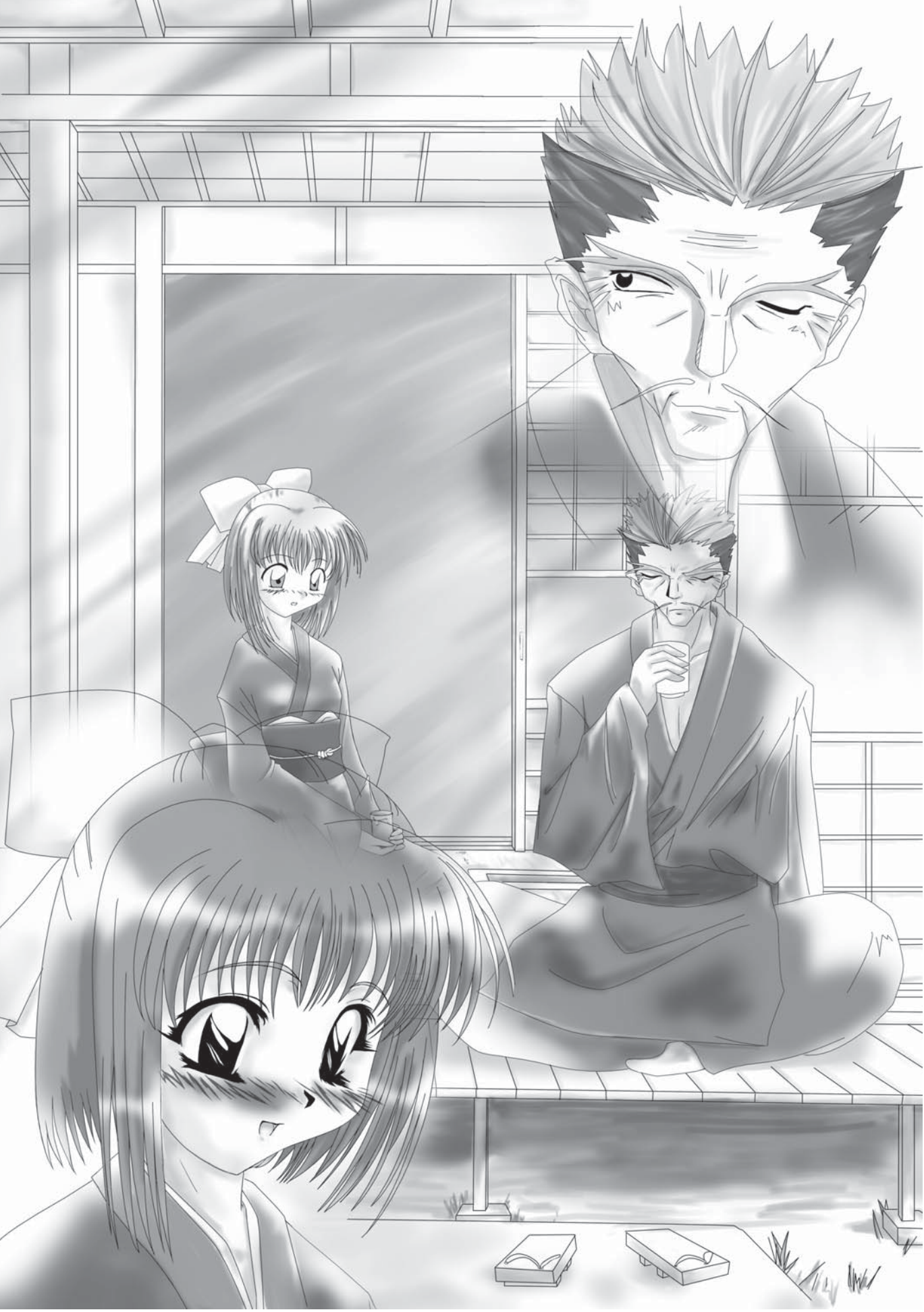
そして、宗玄はなぜ琥珀が——というその理由を薄々嗅ぎ取っていた。

だが、それ以上に幹久に干渉をしなかったのが宗玄であった。かつて、幹久の様な常ならざるモノにと戦い、その存在に深く付き合い、それが滅びるのを座視するしかなかった宗玄の、それが一つの哲学なのだった。

宗玄が琥珀を、幹久を、そしてかつての知人である黄理を記憶の中に巡らせていると、板の間の縁側に、たばたばという琥珀の足音が鳴る。

「先生、お待たせいたしました」

「ああ、すまんな嬢ちゃん」



琥珀は宗玄の傍らに正座すると、お盆の湯呑みを台と共に進める。
宗玄は湯呑みを手に取り、一口緑茶を啜る。

「ふむ、嬢ちゃん……なかなか風流な住まいじゃな」

「いえいえ、静かですけど鄙びたところですよー」

翡翠は驚きと緊張が解け、普段の砕けた口調に戻っていた。宗玄と琥珀は師弟であつたが、そんなに畏まった関係ではない。長閑な口調の琥珀に、宗玄も髭をしゃいて笑っている。

一人はしばしお茶を啜って、昼過ぎの長閑な時間を無言で味わっていた。やがて、琥珀がおずおずと口を開き始める。

「先生、その……志貴さまや秋葉さまの様子はどうですか？」

「ふふ、嬢ちゃんは毎週あの遠野の屋敷に戻っている筈じゃが……」

……確か嬢ちゃんは毎週あの遠野の屋敷に戻っている筈じゃが……」

さもおかしな事を聞いたかのように宗玄は笑って答えると、琥珀は慌てて湯呑みを置いて両手を振る。

「その、確かに戻っているんですけど、その……やっぱり気になります、私が居ないときに志貴さま達はどうかされているのかなー、と」

琥珀が志貴の事を語るときの、僅かに籠もる感情の起伏を宗玄は気が付いていた。眼では穏やかに琥珀を見つめているが、その上にはなんとなく、気恥ずかしいような色が認められた。

宗玄は湯呑み片手に顎をさする。

「まあ、僕もあまりあの家に顔を出している訳ではないがな……まあ、伝え聞く話が多いが……変わつたらんのは翡翠の嬢ちゃんぐらいではないのかな？ 相変わら

ず料理の腕はまだだと聞か……」

「そうなんですよねえ、あつちに戻るたびに翡翠ちゃんに教えているんですけども、どうしても翡翠ちゃんの料理って上手くならないんですよねー」

不思議そうに琥珀は首を傾げるが、宗玄は苦笑いするばかりである。

もつとも、この話は宗玄が翡翠の料理を口にしないから笑い事に出来るのであり、食卓の当事者である秋葉や志貴には笑えない話であつた。

宗玄は翡翠の味覚自体に問題があることを識つてはいたが、目の前の琥珀と同じ顔をした双子の事を悪し様に語るのには憚られた。そんな苦笑いの宗玄に、琥珀が話しかける。

「でも、翡翠ちゃんも頑張らないといけませんよねえ……」

「まあ、あの嬢ちゃんなら心配はないじゃろ。で、遠野のところが秋葉のお嬢じゃが……」

秋葉の言葉が出た瞬間に、すと琥珀に一抹の緊張が走るのが分かつた。

琥珀の顔は笑いこそ浮かべているが、眼が真剣になっているのが宗玄にはわかる。目の前の琥珀と秋葉の間に何があつたのかは想像に任せるしかない宗玄であつたが、琥珀の様子からするとよほど大変なことがあつたのだな、と察するばかりである。

宗玄は琥珀を眼にしたまま僅かに口を止めていたが、すぐに喋り始める。

「まあ、お嬢も変わったほうじゃろ。あの一族の、屋敷の人間らしく硬く恐くなくていいが、まあ……年頃の娘さんにしてはあの肩肘の張り方は勿体ないな」

「はあ……その……秋葉さまのご健康はどうなのですかー？」

琥珀はそうためらいがちに聞く。かつて秋葉付きであり、秋葉に血を与えて遠野寄りに近づけたのは琥珀であつた。

宗玄も秋葉の遠野寄りのことは気が付いていた。なにしろ、先代の幹久が遠野の

血に耐えきれずに自壊したのを見ていたのが彼だったのだから。一時は志貴と並んで容態が危険な方に動いていた秋葉であった。

遠野秋葉は、突然変異とも言えるほど強い遠野の先祖返りである——そのことを知らぬ草原ではない。

だが、宗玄が見る限り今では——

「ああ、その事には心配はいらなくて。まあ……定期的に輸血の血液は届けておるが、あんなに別嬪な娘さんなのに、血を飲むのが欠かせないと世間に知られたらなかなか大変ではないかと思うの」

「でも、それでも『これは私の普通の食事です。魚を生を食べると血を飲むの、何処が違うのですか?』とか秋葉さまは仰って言い訳されますよ」

いかにも秋葉が言いそうな言葉を、口振りを真似て琥珀がキッと口にする。二人とも可笑しげにからからと喉を上げて笑う。

宗玄はぼん、と膝を一つ打つ。

「ま、あの嬢ちゃんの言いそうな事じゃ。なんだかんだゆうても、志貴の坊主をいびって楽しんでると聞くが……ま、素直なことではないな」

「秋葉さまも、もっと志貴さまにお優しく接されればよろしいのですけどね」

違う、と宗玄は琥珀の言葉に応じる。

そして、志貴の名前に話は触れ、宗玄は袖を繰って腕を組み、琥珀を上から下まで眺める。

にわかには言葉を無く、自分の方を見つめる宗玄を、琥珀は瞬きもせずに見つめていた。

「さて、志貴の坊主のことじゃが……」

そう言い出し、宗玄は手の掛かる患者であった志貴のことを考える。

宗玄はかなり常軌から外れたところにいる医師であったが、その患者であった

遠野志貴も常軌を逸した患者であった。

なにしろ一度死に、《共融》によって命を吹き返したものの、どう考えていても生きてるのがおかしいという患者なのだ。体軀は健全に育つがその中身は不健康そのもので、具合が悪くなるとあたかも白血病のような病状すら呈し始める。だが、それが直ると貧血気味な体調を浮遊するが、そんな不安定で繊弱な体質と裏腹に握力や腕力などは常人のそれを上回るものがある。

不健康な身の育む強力な身体能力。強靱な器に宿った不健康な身。

普通の医者であれば、こんな常識外れの患者には匙を投げるところであった。宗玄も現実匙を投げ掛けていたが、ある一つのことを考えるとその病状は全てが納得できた。

遠野志貴は——元の名を七夜志貴と云う。

そして、宗玄の知己であった七夜黄理の息子である。これが全ての鍵。

——まあ、よくも親子揃ってまともではないもんじゃわい

宗玄は袖を抜き、懐手しながらそう思う。皺の寄った顔には、不思議と愉快そうな表情が浮かんでいるのを琥珀は見つめていた。

「半年ほど前は生死の境を彷徨っておったが、あれから儂の手が掛からぬほどに元気になっておるよ。まあ、鍼灸の類を試せる患者がおらなくなったのはちと残念じゃがな」

宗玄はくっくく、と背を振るわせて笑う。

まともではない患者であった志貴には、そもそも何をしても無駄であることは宗玄は分かり切っていた。分かっていたが故に、効能も確に分からない薬餌や整体や鍼灸を試し、治れば儲け物ぐらゐの気持ちでいろいろ治療を実験していたのである。

故に志貴には藪医者と言われて好かれていなかったが、宗玄にしてみればまともな患者ではないお前に藪呼ばわりはされたくない、とも皮肉に思えるのであった。

だが、そんな志貴も近頃はすっかり健康な体になっていた。その原因は……

「まあ、藪の儂にはなんともならんが、志貴の坊主の恢復は嬢ちゃんのお陰じゃて」
「あ……はい……」

宗玄の言葉に、琥珀は真っ赤に頬を赤らめて俯いてしまった。

琥珀は宗玄の言葉の中に潜む、志貴との関係の事を感じていた。もしこれが他の人であれば琥珀は平穩を保って接することが出来るのであるが、遠野にまつわるのことを熟知している宗玄の前では、隠しきれない。

それでも琥珀は何とか自分の態度を言いつくろうと努力する。

「あ、あら、いやです先生ー、私は志貴さまにお世話をさしあげたのですけども、そんな感謝されるようなことは何もしてませんよー」

——やはり、凶星じゃったか

赤くなりながらもじもじとし、言葉尻に感情の慌てた起伏が見え隠れする琥珀を眼にして、宗玄は懐手しながらにんまりと笑った。

琥珀が巫淨の血を継ぐ共感者であることは、宗玄は知っていた。そうでなければ、遠野寄りに苦しむ幹久が法を枉げて手元に琥珀と翡翠を置くはずがない。さらに、七夜とも縁のあった宗玄は、七夜・巫淨・浅神・両儀の数奇な宿命を持つ四家の事をも知っていたのである。

宗玄は、巫淨の共感者との契約の成立が何によって行われるのかを——察していた。だが、宗玄の眼から見ると幹久は共感者のおこぼれに預かっているだけであ

り、本当の共感が成立したとは思えなかった。

本当に共感者と共感が成立するというのは、死線を彷徨う志貴が一転して健康に戻るほどに強い力なのだ。そうでなくては、代々血によって継がれてきた超能力足り得ない。

宗玄は、志貴の恢復が琥珀が翡翠に依るものだと見ていた。だが、態度が変わらない翡翠に比べると、このように取り繕うとする琥珀の方であるのは明白であった。

幹久の元にいる琥珀は、宗玄には不憫でならなかった。その為に、少しでも彼女の苦しみが逸れるようにと己の技の全てを琥珀に教え込んだのであった。だが、今の琥珀は過日の虚ろさはなく、内に琥珀自身の命と、志貴の命が宿って居るかのようになり満ち足りた姿に見えていた。

「ふ、ふははははははは」

宗玄は琥珀の姿を見ながら、不意にこみ上げてきた笑いに喉を揺する。

琥珀も赤い顔で宗玄の顔に顔を向けるが、老人の如何にも呵々大笑という様子を見ると、その顔をほころばせる。

「なに、志貴の坊主がな、面倒を見る必要もないほどピンシャンしとるのに診療所に良くなるんじやよ」

「志貴さまが、ですか？」
「ああ、滅多に顔を出さなかった坊主がな。どうも儂と嬢ちゃんが師弟だと云うことを知ってか、色々尋ねに来るわい」

宗玄の脳裏に、診療所の志貴の姿が思い浮かぶ。

診療所の鴨居をくぐり、悪態を付く志貴ではあったが琥珀のことにしきりに触れ、色々なことを知っていたが「そんなもん、嬢ちゃんに自分で聞かんのか？」と宗玄が巫山戯るように聞き返すと、志貴は赤くなったり青くなったりと小忙しく表情を変えるのであった。

それが宗玄にはおかしくてならなかった。志貴には実験台にして楽しむことは出来なくはなつたが、今は琥珀の事で志貴をつついて楽しむのが宗玄の娯楽であつた。

志貴はそういう宗玄を『爺さんの悪趣味』だと口を付いて罵るが、志貴より遙かな人生の先輩である宗玄には全く応えたところはない。

「なあと、志貴の坊主も腐つた達観を弄ぶだけではなく、ようやく年頃の若い衆らしく恋の悩みにかかずらつておるのかと思ふとな、おかしくてたまらんわい」

くつくつくと宗玄は可笑しげに云う。

「先生、志貴さまが……ですか？ そんな、私に直接お伺いになればよろしいのに」

「なあと嬢ちゃん、無粋な事は言うもんじゃない、これが男心というやつよ。嬢ちゃんはのんびり構えて坊主が右往左往するのを眺めておればいいわい。それくらいやつても、なあと、志貴の坊主のことじゃからな……」

琥珀はそうですかー？とときよとんとした顔をして頷く。

宗玄は琥珀から視線を外し、眼をまた農家の庭先に遣る。雌鳥は庭にはいなく、裏かどこかに回り込んでいるらしく鳴き声も聞こえない。まったく長閑な、春の風景。

宗玄は琥珀を見ずに口を開く。

「……よかつたの、嬢ちゃん」

「……はい？」

「おめでとう、と云えば良いのかわからんが、昔の嬢ちゃんとは変わつて、今ではすっかり幸せそうなの……志貴の坊主に嬢ちゃんは勿体ないぐらいじやが」

宗玄は、なんとなく切なげな顔をする琥珀の前に一旦言葉切る。そして、袂から封筒を取り出し、軽く手の上に載せる。それは、琥珀が師である宗玄にこの地から送つた手紙であつた。

息を詰める琥珀に、宗玄は再び喋り始める。

「嬢ちゃんから手紙を貰つたときには、いろいろ悩んでいるのかと思つたが……実際に会つてみて安心したわい。嬢ちゃんは四季の小倅や秋葉のお嬢にいろいろやらかしたみたいじやが、悩む事はなにもあるまい。」

なに、遠野や七夜はあんな奴らばかりじゃからな」

くつくつと笑う宗玄であつたが、今度は琥珀は笑わなかつた。

僅かに調子が外れる思いが宗玄にはしたが、構わずに話を続ける。

「嬢ちゃんも志貴の坊主も、僕にとっては……まあ、娘や息子みたいなもんじや。二人とも頼りないところがあつたが、こうやつて二人が幸せになつたかと思ふとな……」

ふふふ、可笑しいな。朱鷺恵よりも、ともすると嬢ちゃんの方が娘のようにも思ふわい……」

宗玄の娘である朱鷺恵が志貴と一時付き合つていゝことも宗玄には分かつていた。だが、それは多分に朱鷺恵の持つほんやりとした頼りなさゆえの事であり、一時のことであると思ふと宗玄にはあまり考えるところはなかつた。

そもそも、そう言うことで世間の父親並に思い煩うのは、宗玄の質ではない。

「先生……」

「まあ、嬢ちゃんに関しては僕はまるで志貴の坊主に嫁に出す岳父の心地がするわい。嬢ちゃんにはそういう者もおらんのだから、せめて僕がそんな心地を味わつたとしても罰はあたらんじやろ」

宗玄がそこまで言うくと、琥珀はにわかに背筋を伸ばして姿勢を正す。

怪訝そうな眼で宗玄が見つめる中で、琥珀は僅かに座を下がり、縁側の板の間に両指を付き深々と頭を――下げる。

「……？」

「先生……今までいろいろとお世話になり有り難うございます。それに、志貴さまとのことをせっかく仰つて戴いて、本当に……本当に……」

琥珀は頭を上げなかった。

宗玄は、頭を下げたままの琥珀が涙を流しているのだと察していた。だが、そこで手を取つて顔を上げさせる様なことをせずに、琥珀には黙つて頷くだけであつた。

しばし琥珀は頭を下げたままであつた。

宗玄は下駄に脚を通す。

「なに、僕は医者じゃが藪医者でな、人は何とか治せるが人は幸せにはできません……嬢ちゃんや坊主が幸せになつたのは僕の腕ではなく、二人の力よ……僕のような老人には気にせずこれからも二人、助け合つて暮らしていくといい」

「はい、先生……必ず……」

「しばらく落ち着くまで、この村に居るのもいいが……ほとぼりが冷めたら坊主の処に戻つてやれ、嬢ちゃん。そうすれば坊主も喜ぶ」

はい、と答える琥珀に宗玄は満足そうに頷き、縁側から立ち上がった。

「うむ、忙しいところを邪魔して済まなかつたな、嬢ちゃん。」

せっかくの茶は美味かつたの……これ以上邪魔もできないので、僕は行くぞい」

宗玄が立ち上がり、琥珀にそう言うやつの事で涙を拭つて顔を上げる。白いリボンが縁側の上で動くのを宗玄は視界の片隅に捉えて、向き直る。

まだわずかに目尻に涙を貯めた琥珀が、宗玄を心配そうに眺めていた。

「先生、せっかくですからゆくりなさつていただいてもよろしいので……」

「いや、何。ここにはもともと寄り道しただけじゃからな。」

本来の用は、まだ盆や彼岸は遠いが……小僧の面を眺めているとあやつの墓を拜みたくなつてな」

あやつ、という言葉に琥珀が不思議そうな顔をする。宗玄は名前を口に出していなかったことを思い出すと、軽く咳払いをして説明する。

「ああ……すまん。あいつとはな、黄理のことじゃよ。」

七夜黄理——志貴の実の親父じゃ」

琥珀には初めて耳にする名前であつた。だが、その者が志貴の実の父親であるというのを聞くと、琥珀は知らず背筋を伸ばして宗玄の顔をうかがう。

黄理の名前を口にしたときに、宗玄の顔には何とも言えぬ苦しい色が走っていた。

「先生……志貴さまのお父様をご存じなのですか？」

「浅からぬ縁ではあつたがな……まあ、両儀とも縁が切れておつたし、遠野廻りの連中では刀崎の一族が見知つておつたぐらいだな」

「その、志貴さまのお父様は……どういう方だったのでですか？」

初めて聞く志貴の父親に関して、興味を隠しきれない琥珀。宗玄はしばし口をつぐんで物思いに耽ると、ぼそり、と口にする。

「馬鹿な男じゃつた」

「——？」

まるで吐き捨てるような宗玄の言葉に、琥珀は思わず眼を見開く

「人並に幸福になることを拒否した癖に、最後の最後でその道を外れて幸福を求めしまった……故に、あやつは不幸になった。それも、あやつの息子の志貴の為……不器用で馬鹿な男じゃつたな」



そこまで苦しげに云うと、深く宗玄は溜息を吐く。そして、柄にもないことを口にしてに気が付くと、仕方なさそうに頭を振って琥珀を見つめる。琥珀は微動だにせず宗玄の言葉に聞き入っているようであった。

「何……親の因果が子に報い、とはいうが、黄理と志貴の坊主は、親子二人でやっと一人分の幸せを手にしたようなものじゃな……親子揃って不器用じゃったが、息子の方は幸せになれるな……嬢ちゃんのお陰じゃな

さて、儂はそろそろ……」
「待って下さい、先生……」

琥珀にそう言われて、宗玄は歩き始めた足を止める。

琥珀は縁側から下りると、履き物をつ掛けて農屋の裏の方に消えていった。宗玄が庭の中でしばし待っていると、十分ほどして琥珀が庭に小走りて戻ってきた。

その手に、摘んだ白と紫の菖蒲の花を持って。

「これを……志貴さまのお父様のお墓にお願いします。私からと志貴さまから……天国のお父様に何卒よろしくと……」

「……あやつが天国にいるかどうかはわからんが、嬢ちゃんの頼みとあれば預かろう」

宗玄は、自分の元まで走り寄っていた琥珀の手から、そっと花を受け取る。

花を渡した琥珀は、じっと言葉もなく宗玄の顔を見上げる。
風が動き、宗玄の手にある菖蒲の花の、大きな花を揺らす。

「それでは先生……道中のご無事をお祈りします」

「ああ、嬢ちゃんも志貴とは上手くやることじゃ……そうそ、時々はこっちにも顔を出してくれるとありがたいのう

さて、嬢ちゃん。達者でな」

宗玄はそういって琥珀の方にぼんと手を置くと、くると背を向けて生け垣の切れ目の門に向かって歩き出す。

それを琥珀は頭を下げながら見送る。琥珀が頭を上げると、土を踏む下駄の音はそとに消え、宗玄の姿は見えなくなっていた。

琥珀は一人で庭の中に佇む。

先ほど花を揺らした風が、琥珀の白いリボンを揺らしていった。琥珀はそっと手を伸ばし、髪を留めている思い出深いリボンに触れる。

「志貴さま……」

琥珀の恋人を、二人でようやく幸福を胸に納める事が出来た人の名前を呼ぶ声は、誰に聞かれることもなく、琥珀の住まう信州の空気の中に、風に運ばれ消えていった。

風は、志貴の元までその言葉を運ぶのかは——誰も知らない。

〈了〉

《後書き》

どうも、阿羅本です。

今回のお話は志貴も秋葉も無しで、主役を時南宗玄先生にしてみました……おやじです、ええ、おやじ。阿羅本は親父書くのが好きなんですよ、こう見えても。

琥珀さんの師匠が宗玄先生、ということなので想像の翼をひろげて、こんな風な話があればいいなあ……と思いつながら書いていました。琥珀さんも書いて、ほんのりとした暖かいかんじも出て個人的には非常に気に入っているSSですね。

それではどうも、お読みいただき有り難うございました。

でわでわ!!